

【概要】

ことば、記憶、“Creolization”

——前衛小説として読むラフカディオ・ハーンの『チータ』*

難波江 仁美

はじめに——『チータ』の誕生

Lafcadio Hearn (1850-1904) は、1877 年に約 7 年間暮らしたシンシナティを離れてニュー・オリンズに新天地を求め、そこで *Daily City Item* (後の *Times Democrat*) の新聞記事やコラム、翻訳など精力的に執筆活動を行った。南部を代表する作家 George Washington Cable (1844 -1925) との出会いにも触発され、クレオール語やクレオール文化、そして一層文学へと彼の関心は向けられた。そして 1887 年 5 月、*Harper's New Monthly Magazine* 掲載の“The Recent Movement in Southern Literature”という記事にルイジアナ作家としてケーブルと並んで紹介されるまでになる。ハーンは 1886 年から 1887 年にかけてグラン・アイル島に何度か長期滞在して小説の執筆に専念、*Chita: a Memory of Last Island* (1888 年 4 月 *Harper's New Monthly Magazine* (No. 455) 掲載、翌年単行本出版) を完成させた。この小説はケーブルから聞いた実話——ハリケーンで生き残った白人クレオールの少女が漁師に助けられ、その後身につけていた装身具から身元がわかりニュー・オリンズの生家にもどるが、町の生活に順応できず島に舞い戻り漁師と結婚した——に着想を得たものだが、ハーンの小説では少女の身元は読者には示唆されるものの、最後の実父との出会いは認知に至らず、彼女は孤児のまま沖合の小さな島で養父母のフェリウとカルメンに育てられることになる。友人 Henry E. Krehbiel 宛の手紙にハーンはこの小説について「フィロソフィック・ロマンスの精神で現代の南部の生活を描く試みです—読者がキリスト教、汎神信仰、あるいはスペンサーの思想に従っていうところの魂、神、不可知なるものが互いに矛盾しないような世界を描こうとしたのです」(Writings 14:28-29)と書いている。しかし、個々の宗教や思想に通底する究極の汎神論に基づいた「フィロソフィック・ロマンス(哲学小説^{ロマンス})」を目指すという大志を抱きながら、翌年の『ユーマ』(1890)を最後にハーンは小説を書くことはなかった。本論では、不毛に終わったとはいえ、『チータ』が意識や脳の働きに注目して彼なりの汎神論を展開しようとした意欲的かつ前衛的な試みであったことを検証したい。

省略記号と空白

『チータ』を読んでまず気づくのは、ダッシュやピリオドといった省略記号の多用である。その空白は段落や文章の始め、中、終わり、あらゆる所に散見される。「オールド・セミコロン」(Frost 74) という異名で呼ばれ、句読点の使い方一つにも注意を払ったハーンが、根拠なく省略記

号を使ったとは思えない。言葉にならない部分がテキスト内に空白部分として挿入されたと考えていだろう。思考は一つ一つがピリオドによって別々に完結するものではなく、一連の流れとして意識されるものだとハーンが考えていたからである。たとえば以下は小説の最後の場面で、チータの実父ジュリアンの死の間際の意識である。

Out of the darkness into—such a light! An azure haze! Ah!—the delicious frost!

All the streets were filled with the sweet blue mist Voiceless the City and white; --crooked and weed-grown its narrow ways! Old streets of tombs, these. Eh! how odd a custom!—a Night-bell at every door. Yes, of course!—a *night*-bell!—the Dead are Physicians of Souls: they may be summoned only by night, --called up from the darkness and silence. . . . Yet *she* [Adele] ?—might he not dare to ring for her even by day? (109) **

朦朧とした意識のうちに、稲妻が光るように突如としてジュリアンは過去の記憶を思い起こすが、その記憶は断片的に浮かんで消える。だが彼の意識は途切れることはない。それがテキスト上においては“—”や“...”といった省略符号によって繋がれていく。重要なのは、この意識の流れの描写が医者ジュリアンの脳内で起こること、そしてアメリカそして南部の暗い過去(南北戦争、奴隷制、疫病)から目をそらさずに医者として献身的に務めてきたジュリアンの最期の意識に小説のクライマックスが設定されていることである。複数言語を習得した彼の脳内では英語はもちろん、フランス語、ドイツ語、クレオール語、さらに海の音や彼のために祈りを捧げるカルメンのスペイン語の祈りといった新しい情報がすべて響き合う。この場面では、彼の自己中心的な意識だけでなく、言語や人種、死者と生者、そして記憶と忘却が取捨選択されることなく、彼の意識と無意識の網の目にすべてすくい取られるのである。

ジュリアンの知らない世界——チータの島の生活

ハーンはアメリカ社会における盲点(空白)に気づく人物として医者ジュリアンを設定している。ハリケーンで家族を失い、心的外傷にも苦しんだジュリアンが、南北戦争や疫病勃発時に医師として献身的に尽くし、他者の痛みに寄り添う人物に生まれ変わる様子がジュリアンの視点に寄り添いつつ丁寧に描かれる。その彼が最後まで知り得なかったのが娘の安否であり、娘が育つ本土から離れたヴィオスカ・ポイント岬のクレオールの世界である。

かつての避暑地であった島が 1856 年のハリケーンによって分断されて「忘れられた島 (“L’île Dernière”）」(第一章タイトル) となったように、沖合の島々はアメリカ本土から「忘れられた」領域である。小説はその自然を前にして無力な人間を描くが、興味深いことに、恐ろしい自然描写の直後に一人の漁師がクローズアップされる。冷静に海の水位を観察して安全確認をする経験値高く冷静な漁師フェリウ・ヴィオスカである。漂流していたジュリアンの娘を助けるのが彼であり、娘は彼の名前のついたヴィオスカ・ポイント岬という多言語多民族で構成される

クレオール共同体で育つことになる。その島は、「忘れられた」というよりもアメリカが「忘れたい」と排除してきた人種混淆のクレオール社会が平和に営まれる所でもある。娘はチータと名付けられ、父の知らない、すなわちアメリカの盲点である島の世界で育つのである。

チータは当初4歳にしてすでにニュー・オリンズ白人クレオールの「偏見 (“prejudice”）」(72)を身につけており、島のマニラ人を「逃亡黒人=奴隷 (“negues-marrons”）」、カルメンの黒い聖母像を「くろんぼ女 (“negrai”）」と貶したりもした。そしてその「偏見」は、フェリウのリベラルなクレオール社会の「共和主義 (“republicanism”）」(72)に反すると断定されるのである。しかし、フェリウのリベラルな島の環境は、彼女の「偏見」を修正することになる。ハーンは1886年に『タイムズ・デモクラット』に寄せた“Scientific Value of Creole”という記事で、均一した教育を施す公立学校は「クレオール(性)を抹殺している」そして「19世紀の教育制度がまだ行き届かない小さな離島以外ではそれが現状だ」と指摘している。もしチータがニュー・オリンズの白人クレオール社会で育っていたとしたら、「クレオール(性)は抹殺」されたであろう。人種差別的価値観が定着し、彼女の身体もコルセットと衣服で封じられ、幼少時代に自然と学んだ黒人クレオールの乳母が話す「ガンボ」もスタンダードなフランス語、あるいは英語に矯正されたであろう。「離島」の生活はチータの「クレオール性」を育んだのである。実父ジュリアンが11年後に島に往診に訪れ病に倒れたとき、看病に現れた彼女は彼に「バラグアン (“baraguin”）」(粗野なフランス語)で話しかけ、「軽やかなふんわりとした鉄紺色の衣をまとい、男の子用の靴をはいて」いた(100)。彼女はクレオールの島で育ち、社会規範に縛られることなく、しなやかな身体と分け隔てない労りの心を備えた人間に成長していた。ジュリアンはチータの出生の秘密を知ることはないが、瀕死の状態にありながら彼女の容貌がラテン系のカルメンでなくノルウェー人の血を引く妻に似ていることの医学的根拠を考え始めるのである。実子と認知する必要はない。チータの存在は彼の意識を強く揺さぶり、長い歴史の中で起こってきた人種混淆の過程に彼は思いを馳せるのだ。人間の遺伝子はみなどこかで繋がっている、そして意識も集合無意識のようなものとして共有されているはずだからである。

「医学小説 (“a medical novel”）」への展望

ジュリアンの死に場所となったのがヴィオスカ・ポイントであるのは重要である。彼の意識の空白、つまり彼の知らなかった世界が、チータの共和主義的クレオールの共同体によって補完され、無関係と思われていたことに関係性が生じていくからである。興味深いのは、そうした彼の意識の広がり「脳 (“brain”）」という単語を用いながら描かれることにある。

死の床で、「記憶や疑惑や狂おしい思いが、ジュリアンの脳裏を、電気を帯びた流れのように、リズムをつけた鼓動と共に駆け抜けた。だがそのショックが過ぎると、理性が語りかけた」(100)のである。チータの姿は「スペクトルの稲妻のように彼の目に入り、そして脳に入」り、そし

て彼の「血管」が騒いだ。「脳」は、刺激を受け、それが電流のように伝わり、理性に認識される。彼には死んだ妻、そして 11 年前のハリケーンの恐ろしい場面が蘇るが、なぜか妻はスペイン語で話している。新しい情報が脳を刺激し、新しい組み合わせを作っていくのだ。彼の脳の働きはまさに「脳はオープン・システムであり、外界の情報を取り入れ、常に変容して、定まることがない。矛盾や空白を脳は常に補おうとする」(Ellen Spolsky Armstrong 54 に引用)という現代の脳神経学の見解に通じるかもしれない。ジュリアンの脳は、記憶や意識の空白を埋めようとあらゆる情報を受け入れる。彼の終焉の地がヴィオスカ・ポイントであるのは、「共和主義的」クレオール社会こそ彼にとって究極の空白(未知なるもの)だからである。医師ジュリアンの脳の働きを小説のクライマックスとすることで、朦朧とした実態のない意識を介して暗にはあるが、ハーンは人種混淆という歴史的事実を医学的に描くことに挑戦した。

当時親しくしていた友人で医師の George Gould への手紙にハーンは、「今の医学は科学と哲学とをつなぐもの」であり、医者とは古代の医者のように「魂」も治療することができる、そして「医学小説」^{ノヴェル}の存在を信じる(Writings 14: 62-63)と書いた。クレオールを語るには人種混淆という問題を避けることができないが、最新医学に基づいて脳や意識の働きを解き明かす「医学小説」であれば、クレオール化する社会や思想の実像を客観的に描くことができるだろう。ハーンは今一人の友人でニュー・オリンズの外科医 Dr. Rudolf Matas に『チータ』を献じた。医学の進歩こそ社会や心の問題を解決するという思いをこの若き医者に託したのではないか。ハーンにとって「哲学小説」^{ロマンス}と「医学小説」^{ノヴェル}は同義であり、それは新しい小説への挑戦であった。

* 本報告は、2017 年 2 月 11 日に行われた富山大学ヘルン研究主催・学長裁量経費採択事業・科学研究費補助金挑戦的萌芽事業「ラフカディオ・ハーン研究シンポジウム」における発表の概要であり、JSPS 科研費(課題番号: 16K02498)の助成を受けた研究成果の一部である。

** Chita からの引用は以下頁数を括弧で示す。下線は論者。

引用文献

Armstrong, Paul B. *How Literature Plays with the Brain: the Neuroscience of Reading and Art*. Johns Hopkins UP, 2013.

Coleman, Charles W. Jr. "The Recent Movements in Southern Literature." *Harper's New Monthly Magazine*. vol. 74, May 1887, pp. 444-60

Frost, O. *Young Hearn*. Hokuseido. 1958.

Hearn, Lafcadio. *Chita: A Memory of Last Island*. [1890] Ed. D. LaBarre. UP Mississippi. 2003.

---. "The Scientific Value of Creole." *Times-Democrat*, 14 June 1886, p.4.

---. *The Writings of Lafcadio Hearn*. 16 vols. Houghton Mifflin, 1922. Reprint. Rinsen, 1973.